

TAKE FREE

BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine

奥多摩町公式タブロイド

18人の奥多摩物語
Green life stories.

#01
First ISSUE



BLUE+GREEN JOURNAL

Green life stories.

18人の奥多摩物語

紛れもなく“東京”でありながら、
誰もが知る“東京”の姿は、この町にはない。
移ろう時の美しさを折々に奏でる、
BLUEとGREENからなる肥沃な自然。
都市生活がもたらす暮らしやすさとは引き換えに、
この町だからこそ叶えられるライフスタイルがある。
奥多摩の明媚な自然に抱かれながら、
自分らしい生き方を追求する18人の町民を訪ねた。

Job **Climber**
Name **Yasushi Yamanoi & Taeko**

奥多摩駅でバスを待ってる時。
ああ、生きてるなって思うわけです

部屋の中からでも奥多摩湖の美しい表情が眺められる、山野井泰史・妙子夫妻の住居。二人はヒマラヤやアンデス、ヨセミテやグリーンランドなど、地球上の名だたる山々、岩壁を次々と踏破してきた世界的なクライマー。年に数度のこうしたチャレンジに備えるべく、最適な環境を探し求めてこの場を選んだ。夫の泰史さんという。「二人で、どこか静かな所に暮らそうと考えていた時、すぐに奥多摩が思い浮かんだ。奥多摩なら、走れるな、岩に登れるなという感じで。のんびり暮らしたいということではなく、トレーニングの拠点っていうイメージでしたね」

泰史さんのこだわりは登山時に酸素ボンベを使用しないこと、基本は組織だった登山隊ではなく単独で挑むこと、そして、名前や高度だけで登る山を選ばないこと。難度の高い山に挑戦するのは、持てる技術と知識を駆使し、限界ギリギリの美しいタクティクス(登山のプロセス)で前人未到の軌跡を描くため。他のクライマーとの競争などには全く興味がなく、スポンサーのために登山をするでもない。そんなクライマーとしての志向も、奥多摩にフィットしていると泰史さんという。「一人で本を読んでいて、突然、ひらめいたように登りたい山が決まりましたね。友人同士、クライマー同士で会話とか相談をして、登る場所を決めるっていうのが好きじゃないんです。一人で選んで、一人で考えていけば、本当に自分がその山に登りたいかどうかが明確になる。まあ人生そう長くはないし、心の底から自分のやりたいことをやっておかないともったいないじゃないですか。

登頂して降りてきた時、ああ幸せだったなと思えば、別に賞賛されなくても全然いい。年に1、2回、下手をすると命を懸けて遊びにいくわけだけど、そこに誰かとの競争が生まれるのもいやだし、他人の情報によって惑わされたくない。だから僕は昔から、他のクライマーとあまり交わろうとはしなかった。奥多摩にはいい山がたくさんあるけど、クライマーがたくさん住んでいるというわけでもないし、クライマーのコミュニティがさかんということでもない。それが僕にとっては心地いい」

これまで、不可能だと言われてきたルートを数々、登ってきた山野井夫妻。たとえばネパールと中国にまたがる標高7952mのギャチュンカンでは大規模な雪崩に遭遇し、極寒の岩壁で夫婦がはぐれるという危機をも乗り越え、生還した。そんな挑戦の前に心身を静かに整え、帰還後は生きる意味を噛みしめる場所、それが奥多摩なのだ。「海外に出かける時、でかいザックで奥多摩駅から出発するでしょう。電車の中では、生きてまた帰ってこられるかなと二人で考えている。それでクライミングを終えて帰国し、奥多摩駅でバスを待っている時、ああ、生きてるなって思うわけです(笑)。その瞬間はやっぱり幸せですね」

極限の体験をして帰ってきては、奥多摩でトレーニングをしながら次の挑戦に備えるというサイクル。気分や体調に応じて、走る場所や登る岩を選んでいるという泰史さん。日々、奥多摩で山道や川に接し、静かな時間に満足しているという。「ヒマラヤとかアンデスを登ると、もう本能むき出



しになって、驚くほど判断が冴え、的確に動ける時がある。そういう瞬間はもちろん心地がいいんだけど、周りは乾燥した砂とか岩、氷の世界でしょ。やっぱり暮らすのは別の場所だよなって(笑)。僕も妙子も動物や昆虫を見るのが好きで、色々な生き物と一緒に生きてるなって感じが、奥多摩にはある。自転車に乗ったり、走ったりしている時、偶然、二ホンカモシカに出会うことだってあるし、クワガタにカブトムシ、シジウカラとかヤマガラとか、たくさん生き物が住んでるからね。人がなかなか登れないような沢を進んでいくと、誰も知らないような立派な滝に出くわしたり、なかなかいい稜線とか谷筋を見つけたり。山との一体感、野生動物の一員に戻れたような感覚を得られる場所がいくつもある。つくづく、日本の山は豊かだなって思いますよ」

妻の妙子さんはここ数年、近場の山登りには行くものの、家の前にある畑での作業がお氣に

入りだとか。世界の登山史にその名を刻むほどの女性クライマーでありながら、今は過酷なクライミングから少し距離を置いた状態だ。「昔はしょっちゅう出かけていて、ここに帰ってきて癒されるという繰り返し。でも最近は遠くに行きたくないというか、できれば家にいたいかな。畑を耕すのも、作物の栽培も私一人でやっているの、あまり時間がない。もともと農作業ができることを求めて奥多摩に来たので満足してるし、まあ、少しでも都会に出ると疲れますしね」

暖かい日差しや緑の匂い、頬をなでる風や岩肌の確かな感触、そして、生命力あふれる生き物たちの気配。こうした日常のすべてが、二人の心を満たしていく。目下、次の目標を選定している最中だと語る泰史さん。その様子をつかず離れず見つめながら、そっと寄り添う妙子さん。この夫婦の静かな時間が、今日も幸せに流れていく。



Yasushi Yamanoi & Taeko

Job **Kayak Instructor** Name **Megumi Goto**

かつては東京の老舗文具メーカーでグラフィックデザイナーとして働いていた後藤さん。日頃の運動不足を解消しようという目的で、何気なく始めたのがリバーカヤックだった。「仕事を始めて3年目くらいまでは楽しかったんですけど、景気が悪くなるにしたがって、少しずつ仕事に夢がなくなっていくたというか、そんな時、カヤックを始めたんですけど、たいして運動神経がいいわけでもないのに初日からいきなりうまく乗れてしまったんです。その時、水面から見た景色も忘れられなくて」

当初は川へ行くペースも年1、2回だったものの、数年後にまたカヤック熱が再燃。カヤックスクールの仕事を手伝うようにもなり、いつの間にか、週末は川へ、というサイクルが当たり前になっていった。「たとえば台風などで川が増水するとめちゃ楽しい。そういうことを知ってしまったものだから台風の後、天気の良い日に、なんで会社で机の前に座っていないかならないのかって思うようになってしまった。会社を辞める時、少し勇気は必要でしたけど、我慢してオフィスワークに縛られるのはイヤだという気持ちが強かったんですからね。カヤックはもう人に教えられるくらいになっていたし、そこそこ貯金も貯まっていたんで、なんとかなるだろうって」。

こうして7年務めた会社を離れ、しばらくはカヤックスクールで働き続けた後藤さん。ほどなく独立を決意し、拠点となる場所を探し始める。目をつけたのは絶好の環境がありながら、当時まだ、スクールの少なかった奥多摩

だった。「自然の中に住みたいということより、純粋にカヤックがやりたいからここに住んで、スクールを始めた。だから私、奥多摩に住んでいるのに山登りなんて年一回くらい(笑)。カヤックって流れに乗るとか、体の使い方とか、色々な要素が複合的に合わさっているのだから飽きることなんてないし、練習することがたくさんあって終わりが無い。始めてからもう25年くらい経つんですけど、技術的にまだまだ伸びしろがあるんですよ。私にとってカヤックはエアコンみたいなものでもあって、夏は暑いから川で漕ぎ、冬は日向で体を動かしたいから漕ぐ、という感じで(笑)。自分で乗るのも楽しいし、人に教えるのはまた別の面白みもありますね」

これまで拠点としていた沢井駅近くの店舗に加え、今年はさらに環境の良い白丸湖に新たなペースを設置。店舗兼住居から、川へは歩いて数秒という完璧な立地だ。「カヤックをハブにして知り合いが増えるのってすごく楽しい。だから白丸のペースも色々な人が気軽にプラッと漕ぎに来て、人がつながるような場にしていきたいんです。これだけ急峻な山と、楽しく漕げる川がセットになっている奥多摩ってとても特殊で、貴重。もちろん、地元の人にもカヤックの面白さをもっと広めていきたい」

最も好きな季節は桜が散った一週間後とか。ほんの2日間程度、木々の葉が黄緑色に輝くのだという。そんな季節を経た後には、いよいよ盛夏到来。水面からの美しい眺めが、今から楽しみです。

03

Job **English teacher** Name **David Boylan**

英国出身のボイルンさんが初めて日本を訪れたのは、今から13年前のこと。漫画やアニメに端を発し、サムライ、歴史まで。ジャパニーズカルチャーに傾倒していたボイルンさんは、31歳の時、ワーキングホリデーを利用して1年間大阪に滞在。帰国後も、度々休暇で日本を訪れていた頃に、奥多摩出身の奥様、三枝さんと出会った。遠距離恋愛の末、2人は結婚。英国で新生活をスタートしたが、日本にいる年輩いた祖父母と愛犬のことを想った末、夫婦で奥多摩へUターン。現在は、義祖母、義父母、姪2人を含む義弟家族と、ボイルン夫妻からなる4世帯9人の大家族が1つ屋根の下で暮らしている。子どもがいないボイルン夫妻にとって、4歳と2歳の姪は、娘同然の存在。家族全員で協力して家事、育児をこなし、言葉通り支え合って生活している。「イギリスでは、大人になったら家族と一緒に住むことはありません。家では1人になることがないからたまに大変だけど(笑)、でも毎日とても面白いです」

英会話講師であるボイルンさんは、ほぼ毎日のように福生や立川へと通勤している。その忙しい日々の中を縫い、奥様の三枝さんが「私よりよほど地域貢献している」というほど、地元コミュニティにも参加。剣道クラブと野球チームに所属し、町内のスポーツイベントではボランティアスタッフとして活動。3年前からは、奥多摩の郷土芸能である、夏祭りの獅子舞にも参加するようになった。「町を出た若い人も、夏の獅子舞になると帰ってくる。それはどうしてかな? って。難しそう

かな? と思ったけど、みんなと獅子舞をやったらもっとフィッティングできるかなと思って。獅子舞はつらいです。暑いし苦しいし重いし、首も痛い。でも、とても楽しい!」

ボイルンさんが参加する小沼浦地区の「山祇神社獅子舞」のほか、奥多摩町内13地域で行われる獅子舞は、450年以上も前から伝承されてきたものだと言われる。しかし近年では、少子高齢化による後継者不足の問題が深刻化。この状況にはボイルンさんも警鐘を鳴らす。「みんな一緒に集まって、ビジネスでもないのに頑張っている祭りにする。オールドチーム、ヤングチーム、いろんなジェネレーションと一緒に協力する。そういうコミュニティスピリットは、イギリスにはないもの。とても面白いです。祭りは、地域の心。プライドがある。なくなってしまうたらもったいない!」

人懐こく、真面目で誠実な人柄もあって今ではすっかり地域に溶け込むボイルンさん。生粋の地元人に負けず劣らず、この町を愛する気持ちが強いのは、豊かな自然による影響も大きいという。「ここは東京だけど、ほんとに東京じゃないみたい。秋はきれいな色。冬は雪、春は新しい緑。朝起きて山を見て毎日いいなって思う。天気が悪くても霧があったり、毎日だいぶん違うから。奥多摩は、きれいでいいところですよ」

四季折々、美しい山の風景を撮っては、英国の家族へメールを送る日々。日本の郷土と自然、人々をこよなく愛する彼にとって、この町は理想的なホームタウンになっている。

Megumi Goto / David Boylan

05

Job **Pilates Instructor** Name **Riku Ozeki**

もともとプロサーファーを目指していたという小関さん。ある時、腰を痛めたことをきっかけに、肉体改善の必要性に目覚めていく。彼が強い興味を覚えたのは、筋肉や骨を整え、精神の解放さえも得られるピラティスエクササイズ。のめりこむように勉強を進めるようになった。「東京のスタジオでピラティスを勉強するうち、腰がどんどん良くなっていった。ピラティスはインナーマッスルを鍛えるので怪我をしにくくなるし、心も整っていくのを感じた。でも一週間経つと、また元の状態に戻ってしまうような感じもあって。じゃあ、自然と一体になれるような場所でこのヘルシーな状態を持続できないか、それに、自分自身だけでなく色々な人を健康にしたいと考え、奥多摩でスタジオを始めることにしたんです」

それまでは千葉やカリフォルニア、ハワイといった場所で波乗りをしながら転々と生活していた小関さん。海を中心とした生活から、いき

なり山中心の生活にシフトしたわけだ。「海は波のように動的なサイクルがあって、山には静かで落ち着いたサイクルがある。そのどちらも好きだし、今でも波がありそうだったら海へ出かけるといった感じにバランスを取っています。山にいと雨が降って、水が濾過されて、ここにしかない魚がいて、というのが分かります。もっと下流にいけばどんどん生物の種類が変わっていった、海へとつながっていくプロセスを感じる事ができる。今まで冬はあまり好きじゃなかったんですけど、冬の寒い日、神聖な山でダイヤモンドダストを見たりして、冬が大好きになった。季節の味わい方が広がったのも、奥多摩に住んだからこそですよ」

かつては、都会のせわしないリズムに体調を崩すことも少なかったという小関さん。今では山の中でゆっくりと変化していく四季を感じながら、心身ともに充実した毎日を送っている。

Job **Musician** Name **Syotaro Funakoshi**

12年ほど前までは東京の都心を拠点にし、バリバリのプロミュージシャンとして活躍。奥多摩の鍾乳洞で音楽イベントを企画したことから、松越さんは移住を決意した。「都会とは違うインスピレーションとか、技術を伸ばすといった目的もあったし、今後、この地域にエンターテインメントの要素を注入し、それが可能だという感触もあった。せかせかしてなくて、自分のスタンスも見つめ直せる。こんな理想的な場所が東京にあったんだという印象でしたね」ところが移住して早々、恩義のある人から、奥多摩駅の上に開店する蕎麦屋のしきりを依頼された松越さん。小さい頃、飲食店の手伝いをやっていたこともあり、この依頼を引き受けることに。持ち前のセンスでこのミッションを見事こなした数年後には、自身の店「蕎麦太郎カフェ」の設立を決定。料理人として存分に腕を振るってきた。今では蕎麦やカレー、喫茶などを楽しめるほか、ライブイベント会場としても

機能し、観光客も多く立ち寄る人気店である。「地元で喜ばれるような店や場にして、自分を認めてくれる、応援してくれるような環境も作りたかった。原動力は奥多摩の土地や人への感謝の気持ちですね。それとやっぱり、奥多摩にはなかったビジネスで成功できるんだっていうことを実証したかった。僕らの世代がスターターになって、それを見た人が様々なビジネスを展開するため、ここに移住してきてくれたら面白い。自然もあれば、競合も少ない。ここは、東京都民に未来を見せる場所になり得ると、僕は思っているんです」

長年、封印していたという音楽も昨年、本格的に再開。これからは音楽制作や演奏を軸に、様々な情報発信やイベント開催も実行し、奥多摩の新しいイメージづくりに寄与したいと意気込む。松越さんが次にどんな手を打ち、皆を楽しませてくれるのか。周囲の期待は密かに高まっている。

06

07

Job **Artyarn artist** Name **Ruru Mori**

色とりどりに染めた羊毛を、様々なテクニックを組み合わせて自由に紡ぐ「アートヤーン」。アートヤーン作家の森るさんは、海外発祥のアートヤーンにいち早く注目して日本に広めたパイオニア的存在だ。そんなるさんが、都心から奥多摩へ移住して12年が経つ。「渋谷までバスで10分の日黒育ち。子どもの頃から田舎に憧れていて、犬を飼いたくてのびのびと暮らせる環境を探していたら奥多摩に辿り着きました。主人の仕事のこともあったので、最初は武蔵五日市とか飯能あたりで考えていたんですけど、緑が一番深かったのと、駅から歩ける距離ということでここにしようかって」

引っ越し後も変わらず、本格的に紡ぎを始めた。羊を飼って羊毛を刈り、天然の草木で染めた毛糸を紡ぐ、奥多摩にある草木染め工房「山染紡」。緑あってその工房に所属することになり、ますます染めと紡ぎの世界に没頭。そしてある時、白い毛糸の存在を知った。

「海外のサイトでアートヤーンを知って、とても興味を惹かれて。テクスチャが面白かったり、モコモコと揃いだったり、もともと変わった毛糸がすごく好きだったから。そこから見よう見まねで始めたのが最初」

アートヤーンを始めてまだ間もないうちから、海外のイベントコンテストで入賞を果たすなどみるみると才能を開花させてるさん。ビビッドでカラフルな色使いが特長の作品には、奥多摩の豊かな自然からインスパイアされ、イメージを膨らませて作ったものも多いという。「奥多摩の自然からは間違いなく影響を受けてますよ。ふきのとうが土から出てくるイメージの作品とか。こっけで暮らすまでふきのとうなんて見たことがなかったです。雨だれの作品もそう。緑が深いから雨が降っても美しいなって」

現在、広い庭のある工房を奥多摩町内で探しているという。山の空気に包まれながら糸を紡ぐ、青空教室を開催したいと計画 중이다。

Riku Ozeki / Syotaro Funakoshi / Ruru Mori

BLUE+GREEN Knowledge

森の木々は、
人間との触れあいを求めている

恵みの水は落葉や落枝などでつくられる森の土に蓄えられ、ゆっくりと流れながら栄養を蓄えつつ、ふもとの里へ降りていく。樹木は、暖をとる目的や炊事など、熱エネルギーを生みだすための薪となり、豊かな山菜はもちろん、人間や他の動物たちにとって重要な糧となる。奥多摩に暮らすということは、そんな潤いの森に抱かれながら日々を過ごすということ。そして、自然の大きなサイクルを間近にし、そのありがたみを体感する毎日。幸福感和充足感足感は人々のメンタルを整え、生きるうえで本当に大切なものはなにかということ、をあらためて気づかせてくれる。

「潤い」の効果については、科学的に証明されている。東京農工大学地域環境科学部の宮林茂幸教授はこう説明する。「森林のセラピー作用には、植物から放出されるテルペンという物質が深く関わっている。このテルペンがカラダをリフレッシュさせてくれたり、菌を殺してくれるりもするんです。たとえば、昔の人は杉の葉を日本酒の桶に入れ、雑菌を浄化した。杉の葉を使ってご遺体を保管するだけ長く保存するといったことなど、古くから植物による殺菌作用は知られていたんです。森の中にはこうした力を持つ成分が数十種類も飛び交っていると言われ、そんな空気を吸い込むと、人間が栄養を蓄えるのに不可欠なアミラーゼの値が平均化されていく。また、ストレスを感じると増えるコルチゾールというホルモンが森の中では減少していくといった効果や、脈数の低下なども指摘されています。つまり、人間が本来持つ能力を森の中では取り戻すことができる。そして一度、森に入れば、こうした効果は1〜2週間、持続するというデータもあります」

自然から得られる無形の収穫はまだまだある。お年寄りは霜の具合から天候の流れを読み、作付けの計画を練る。あるいは草花の様子から冬の寒さを予想し、自宅に必要な薪や炭（現在は灯油）の量を計算する。山を歩き、土を感じることで、人々は自らの生活を支えてきたのだ。

「奥多摩の山並みは、日本でも有数の急傾斜。このような場所では林業においても特殊な技術が必要だし、暮らしぶりも特徴的なものになる。こうした技術、知恵を継承する場としても奥多摩は貴重だし、その財産は各所で応用され、育まれ、地域の優れた文化となっていて、山や森に分け入るということは、そんな知恵を授かる行為ともいえますね」

奥多摩に大学の演習林を保有する関係で、この森を長年、見つめ続けてきた宮林教授。その眼差し先にあるのは、この潤いの森に訪れている変化のきざし。東京都全体の水源地としても重要な役割を担う奥多摩の山々が、助けを求めているというのだ。

「奥多摩の小河内ダムは日本でも図抜けて堆砂率の低い場所。ダムには自然と土砂が堆積し、この堆砂率が高くなりすぎると機能が弱まり、水の供給が難しくなって、水質にも悪影響を及ぼす。つまり堆砂率が低いということは、周辺の山林がよく整備され、土砂の流出が少ないという証明でもあるんです。ところが近年、雨が降ると小河内ダムの水が2〜3日濁っていることも多く、周囲の山林が荒れてきていることが分かった」

その理由は思うように進まない森林管理活動だ。日本の森林はその約4割程度が人工林。奥多摩もちろんすべてが自然林であるわけがなく、極端に言えば、高度の高い場所にある自然林の下方に人の手で作られた人工林がある、という構成だ。人工林は定期的に手を入れなければ健康をキープできない。つまり手入れが不足気味になってきているのだ。「人々が木材でできた物を使わなくなったり、あるいは輸入木材を多用すること、日本の林業はどんどん落ち込んでいく。それにより、人工林の手入れが不十分となっていき、森が荒れていくわけです。でもこのままの状態が続けば、東京全域を支える奥多摩の水源滋養機能はどんどん低下し、広範囲の人々に悪影響を及ぼします。森林が荒れば土砂災害のリスクも高まりますから、問題は大きいと言えますでしょう」

この状況に歯止めを掛けるにはどうすればいいのか、宮林教授はこう説明する。「私たちが木材でできた家具や調度品をもっと使うようになり、地域産、国産の木材の需要が増えれば、それが森林の保全につながるでしょう。できれば多摩産材と呼ばれる、東京の木を使った物がいい。たとえば割り箸だって国産材のものをどんどん使えば、間伐が進み、森林を健康にしていける。割り箸は他に使いようのない木材から作ることも可能で、環境破壊とは無縁。むしろ、たくさん使われた方が森や人のためになるんです。小規模でもいいので木材を使ったビジネスをあらたに起こす、といったことももちろん有効ですよ」

山を知り、その恵みを適切にいただくことで、森の健康は保たれる。こうした当たり前のことを、都市部の生活では忘れがちになってしまふ。山の空気を吸い、樹木の輝きを肌で感じれば、やっぱり気づくことは多いのだ。

「奥多摩では年々、鳥獣による樹木の被害が深刻化しています。でも、山を歩く人が増えるだけで森には人間の匂いが満ちていき、鹿や猪から樹木を守ることもなる。つまり、人が森との関係をより深めていけば、森は徐々に健康になっていく。この地に暮らす人、遊びにくる人がもっと増えて、森と賢くつきあうことができる人たちが増えることで、奥多摩の森や川は、豊さを取り戻していくんです」

08

Job Wood dealer Name Kazutoshi Sugawara

面積の94%が森林という環境ながら、後継者不足などで林業の衰退化が著しい奥多摩町。そんな状況を改善すべく、林業に取り組む会社がある。奥多摩の森林を「東京の森」という資源として捉え、森の管理、木材の生産加工、販売までを一貫して手掛けることを目指す「株式会社東京・森と市庭（いちば）」だ。菅原さんは、営業部長として都心と森を繋ぐ役割を担う。「東京にも森があるということ。その森を維持するために必要なこと。そこに住むの人々の暮らし…。木をただ売るのではなく、奥多摩の現状やストーリーも知ってもらいたい。暮らしや働く場所に商品を取り入れていただくことで、木々を身近に感じてもらいたいのはもちろんですが、奥多摩の森そのものを都心に持っていくような価値観に近いかもしれないですね」

菅原さんと奥多摩との出会いは10年前に遡る。環境問題に興味を持ち、法政大学人間環境学部へ入学。座学だけでなく現場に出て実践したいという思いから、奥多摩を拠点にする環境系サークルに入会したのがきっかけだった。「地元の人に会ってヒアリングをするというのが主な活動で、それがすごく面白くて。1人1人に話を聞いてもらえるということを4年間ずっとやっていました。山でとった薪を燃料にしたり、四季を通じて山菜を探ったり、山岳信仰が残っている。シンプルだけどとても豊かな山の暮らしというものを学ばせてもらった」

卒業を控え、一度は企業勤めをしようとい内定を得たものの、「自分で道を切り拓く生き方をしたい」という思いが募り、奥多摩で事業を興すことを決意。知人の紹介で家賃5千円の元

学生寮に移り住み、観光施設でアルバイトをしながら事業計画を練った。そして、23歳の時に起業。「地域プロダクション」をコンセプトに、奥多摩の資源を生かした新事業としてアウトドアウェディング、シェア別荘をスタートした。ところが徐々に手応えを感じ始めた矢先、のびききならない問題が浮上。家庭の事情により、急きょ実家に戻らなくてはならなかったのだ。未練を残しつつも奥多摩を離れ、神奈川県小田原市へ帰郷。不動産会社に勤務し、新生活にも馴染み始めた頃、再び奥多摩への道が拓かれた。「東京・森と市庭」の設立にあたって地元の人々に通じた人材が求められており、菅原さんに白羽の矢が立てられたのだ。悩んだ結果、もう一度奥多摩へ戻ることを決めた。それから3年。「今の仕事は天職です」と菅原さんは笑う。「10年間奥多摩を見てきて、奥多摩の良さをたくさん知っている僕が、心から魅力的だと感じることをお客さんには丸ごと伝えることができる。森がある暮らし、森の中の仕事が本当に豊かなことなので、変な押しつけや無理強いを相手や自分にもする必要はない。ずっと関わってきた奥多摩で育った木を、心を込めて自信を持って売ることのできる仕事から楽しい」

営業職だが、林業に携わる以上、森を管理する能力を身につけたいと「奥多摩山しごとの会」という団体に所属して休日には伐採技術を学ぶ。また、奥様と2人で「waen（わえん）」というブランドを立ち上げ、製材所の端材などを用いたカッティングボードの制作・販売も手掛ける。公私ともに「木」漬けの生活に、今は幸せを噛みしめている。

Job Woodworker Name Yoshiro Haneo

09

古里駅近くの工房で一心不乱に、無垢の木材にカンナを滑らす羽尾さん。奥多摩で最も好きな場所はというと、「この工房」即座に答えが返ってくるほど、現在の環境、ライフスタイルに満足しているとか。

「日曜日は朝9時頃から夜8時頃まで大体、ここで作業していますね。でも、本当は日曜なんていらないほどここにずっと居たいんです(笑)。分厚い木材から少しずつ、塊を削り出していくというのが木工の魅力。木には種類がたくさんあって、匂いも重さ、削った感じが違っているのも面白くてたまらない。裏山でとれた木を使って物を作り、それを求めている人に届けるっていう流れは、分かりやすくていいじゃないですか。ビジネスって昔はすべて、そういうスタイルだったわけですね」

奥多摩に魅せられたのは、大学時代、カヌーをするため、御岳溪谷にやってきたのがはじまり。その時の驚きを今でも鮮明に覚えているという。「あの時は春先で、水の甘い匂いとか、森の香りにうやられちゃって。その印象があまりに強くて、将来はここで生活できないかと考え始めるようになった。もともと何かを作ることが好きだったので、木工はいいかもしれない」

大学卒業後は一旦、一流電機メーカーに就職するも、同時に家具を作る学校にも通い始めた羽尾さん。奥多摩の自然の中で暮らすことを夢見ながら、木工の腕を磨いていった。そして5年ほどオフィスワークを経験した後、いよいよ木工を仕事にすべく、工房を借り、作業機械を導入。生活を大きく方向転換すべく挑戦

を始めた。「自分の思いがどこまで本気なのかを確かめるっていう意味もあり、思い切って会社を辞めた。机の上で数字と格闘するだけの仕事っていうのもピンときてなかったんですよ。物を作るセンスがあったわけじゃないんですけど、興味があるからとにかくやってみようということだけ。今でも木工って難しいなと思ってますけど、同時に、この上ない幸せも感じます。僕にとってストレスは人と会うことによって生まれていて、そこから解き放たれて、静かな場所で黙々と好きなことに打ち込めている。木でできた机や椅子って驚くほど長く使える物じゃないですか。そういう道具を作る仕事ってやっぱり楽しいし、自然の中で暮らしているとアイデアも生まれやすい」

現在の工房ももちろん器用気ある本造の建物。一日中、工房にいても、壁ごしに雨音やそよ風、季節の変わり目目を告げる鳥や虫の音が聞こえてきて楽しい、と嬉しそうに話す。今後の目標、目指す未来についてはこんな答えが返ってきた。「自分としては、これから、ひっそりと木を触りながら静かに生活していきたい(笑)。でも、奥多摩がもっと活性化するといったなどは思っているんです。そんなに大きな産業はなくても、僕のように小さな商いをする人が少しずつ増えて、血の通う生きた町であり続けてほしい。楽しいお店がいっぱいあるとか、子どもがたくさん遊んでいるとか、多くの人がここで生活してみたいって思えるような町。そういう場所で暮らし続けることが僕の理想なんです」

10

Job **Hunter**
Name **Yoshiteru Sakamura**

今じゃ、山に入った瞬間、 色々な生き物の気配を感じるようになった

東京の奥地とも言える奥多摩の峰谷は、背後に2000m級の山々をしたがえる文字通り、山岳集落。坂村さんはこの山中で生まれ、幼い時から猟をして生計をたてる父親を間近に見てきた。

「物心ついた時から家に銃があって、肉は店で買うものじゃなく、山で獲ってくるのが当たり前だったね。生活するには猟が必要で、楽しいとか、可笑げという感情は子どもの頃からなかったんだ」

そんな坂村さんが本気で猟に取り組もうと考えたのは20歳前の頃。実家のわさび畑が獣に荒らされ、生活が脅かされたからだ。仕方なく畑をあきらめ、建設の仕事に就くこととなったが、体が空く日には猟に出るという日々。奥多摩に住む人々の生活を守るため、長年、猟に従事し、今では猟友会奥多摩支部の会長を務める。

「猪は畑を荒らし、鹿は森林を破壊する。雲取山なんて数十年前はお花畑のようだったけど、今じゃあ、ほとんど鹿に食べ尽くされちゃってね。住む人間も減る一方だから、鹿は増え続ける。このままでは山が荒れ果て、土砂災害なんかもどんどん増え、いつかは奥多摩湖だって埋まってしまうかもしれない。だから誰かが獣を駆除しないといけないし、今やれることは精一杯やっておかないと、とんでもないことになっていく」

深刻化する奥多摩の獣害だが、とりわけ問題となっているのは鹿だ。鹿が草木を食べ尽くせば山の土が剥きだしになっていき、土砂災害のリスクが高まる。また、どんどん増え続ける猿や猪も里に降りては畑の作物を荒らしていく。地元猟友会の地道な活動なしでは、山里の安全は確保できないのだ。

昨年、建設の仕事を辞め、猟に集中する生活を始めた坂村さん。時には我慢比べのように何時間も地べたで息を潜め、時には巨大な猪に急襲されることだってある。でも、山での時間は自分にとってかけがえのないものであり、奥多摩の山は愛すべき場所だと、愛そうに笑う。

「今じゃ、山に入った瞬間、色々な生き物の気配を感じるようになった。今日は必ずどこからか獣が出てくるっていうインスピレーションも湧いてきて、そんな時は必ず獲物に出くわす。特に真冬が好きですね。キンキンに冷えた山は音が響く世界。そういう状況で、何かを感じとりうとして五感を研ぎ澄ませる。目には見えないけど、遠くから何かにいらまれている感覚とかね。そういう時間がやっぱり好きだね」

猟友会会長として、目下の悩みはハンターの人手不足。行政も猟師の育成を後押しするものの、本気で有害鳥獣捕獲に取り組もうという人は思うように増えていない。獣害の実態がまだまだ広く知られていないことも奥多摩の大きな問題だ。

「野生動物は増え、猟友会のメンバーは高齢化していく。だから狩猟の意味を理解して、興味を持った人が奥多摩に少しづつ移り住んできてくればなって思う。自分たちの後を誰が継いでいくかは、大きな問題なんです。20〜30年後には奥多摩が獣だらけになってしまうかもしれないんだから」

魚が苦手で、釣りはやらないという生粋の山男。住民の静かな暮らしを守るため、坂村さんは今日も山に分け入っていく。

Yoshiteru Sakamura

11

Job **Cook Helper**
Name **Rika Suzuki**

「なにかに追われるような思いをしなくていいし、日々のちょっとしたことに盛り上げられるのも楽しいよね。奥多摩で暮らすようになって、ものを大切にする気持ちっていうのも強くなった気がする」。氷川の「蕎麦太郎カフェ」でのんびり働きながら、パートナー、犬1匹、にわとり数羽とともに暮らす鈴木さん。もともと都内で会社勤めだったが、ある時から陶芸にハマり、その趣味に集中できる住処を探し始めたのが移住のきっかけだった。「いざとなれば東京の中心まで動めに出られるようにって考えると、やっぱり奥多摩かなって。休みの日は海沢の滝を散歩したり、縁側でのんびりしたり。今は陶芸をお休みしているんだけど、もともと“食”に興味があって、最近、楽しいのはパンと発酵食づくり」。奥多摩に住んで12年目。ここでの生活にもすっかり馴染み、自由なライフスタイルをエンジョイしている。「おとなしさんに、あと10g砂糖がないんですって言うと、ポンと1kgくれちゃったり(笑)。そういう家族みたいな近所付き合いとかも私は気に入ってる。よそのにオープンな土地で、新しく移住してくる人が増えればもっと楽しくなるはず。これからやってみたいのは農家民泊。仕事とのバランスをもっと考えながら、やりたいことを少しずつ進めていきたい」

14

Job **Landlady**
Name **Kozue Arasawa**

創業100年以上になる、1日3組限定の小さな宿「荒澤屋」。ここで、福島県いわき市出身の梢さんが若女将として働くようになって6年が経つ。2歳違いの3児を産み育てながら、三代目のご主人、先代である義父母とともに、仕事にも全力投球する忙しい日々だ。「仕事を頑張れるのは家族、周囲のおかげ。田舎育ちなので最初は気づかなかったけど、この町は子育てに最適。要はみんな知り合いだからなんですよね。周りの人が見守ってくれる安心感がある。これだけの自然に触れられる環境も今や貴重ですし、子ども達も純朴というか、すてきな」。2012年には旅館1階の調理場を改修し、居食屋「炉ばた 赤べこ」をオープン。川魚や山菜、わさびなど地場の食材を使って、板前であるご主人が腕を振るう季節料理と、嘲酒師の資格も持つ梢さんが厳選した約30種の日本酒が自慢だ。「味もサービスも品揃えも一流のものを提供したい。町外のお客様はもちろん、地元の方がご褒美的に利用できるお店になればたら」。最近はず育でと仕事という2足の草鞋にくわえ、町の活性化を目指す地域活動にも積極的に参加する。「奥多摩全体の観光地力をあげたいんです。働く母として、他所者としての視点から今後も意見続けていきたい」

Rika Suzuki / Kumiko Okushi / Fumio Nakai / Kozue Arasawa / Hikaru Suzuki / Fujio Harashima

12

Job **Nutritionist**
Name **Kumiko Okushi**

「食べることは生きること。その大切さを子供たちには伝えていきたい」。生まれは鹿児島。奥多摩に嫁ぎ、40歳の時から定年を迎えるまで、奥多摩病院で管理栄養士として働いていた大串さん。その後も小中学校で食育をしたり、薬膳料理教室を開いたりと、食に関する活動を精力的に続けている。2011年には町の支援事業に応募して「奥多摩・食の文化祭」を企画。第一回は「心に残るお弁当」、第二回は「我が家の味・想い出の味」など、テーマに合わせて町民からレシピを募集。持ち寄られた料理をレシピ集としてまとめて発行している。「奥多摩にはこんな食文化があるんだよ、家庭の食ってすごい。そういうことを伝えられたら。料理って食べたら終わりじゃないですか。とくに家庭料理なんて、記録に残さなければなくなってしまう」。畑を耕し、自家栽培の野菜を使い、丁寧に調理をして食べる。昔ながらのその暮らしを次世代にも繋げていきたい、そう考えている。「奥多摩は四季がはっきりしてるでしょ。だから、四季に合った食べ物を大事にしていますよね。たとえば、芋芋ら、干し柿、味噌や七味。年配の方は今でも普通に作っています。休耕地がいっぱいあるので若いお母さんにもぜひやってみてほしいですね」

15

Job **Owner of Brew pub**
Name **Hikaru Suzuki**

奥多摩駅から徒歩30秒。築70年の古民家を改修した話題のお店「Beer Cafe VERTER」がある。クラフトビールが飲める店として昨年7月にオープンし、今年3月から奥多摩初の自家製ビールの醸造・販売もスタート。代表の鈴木さんは、八王子市出身。奥多摩へは、子どもの頃にキャンプで訪れていたが、以後、ほとんど馴染みはなかったという。「ビールのお店を出そうと思って代々木とかで物件を探してたんですけど家賃とかいろいろ難しくて。知り合いに誘われて最初は軽い気持ちで奥多摩に来てみたんですけど、ビールを飲んだら、これは最高だねって。極端に言えば、ここであら大抵のビールはすごく美味しくて感じるんじゃないかって(笑)」。お店は、ビール職人としての経験とノウハウを持ち、高校・大学時代の友人である辻野さんとの共同経営。ビール作りに欠かせないホップは、町内にある福祉施設の協力を得ながら自家栽培している。「収穫期の9月、10月には採れたてのホップで醸造したビールを提供できるんです。いずれは、麦芽や原材料のすべてを奥多摩産にしていけたら」。町営若者住宅に入居し、今は自身も奥多摩の住人。この町に新しい風を吹き込む存在として、周囲の期待は高まるばかりだ。

13

Job **Hotelkeeper**
Name **Fumio Nakai**

「実はサラリーマンをやっていた間、自分の中ではずっとクエスチョンマークがついていた。本当は自然の中で暮らし、働きたいんだと。都会暮らしをしながも、母親の実家が山里だった影響で、田舎へのほんやりとした憧れを抱き続けてきた中井さん。奥多摩ビジターセンターでボランティア活動をしていたことも手伝って、14年ほど前、移住を決意した。小さい子供がいたにもかかわらず、仕事をいきなり辞め、ある意味、退路を断ったかたちだった。「空き家らしき場所を見つけては、ここ借りませんかと聞いて回るところから始めて。そうしている内に地元の知り合いができ、偶然、臨時で林道整備の仕事を紹介してもらえることになったんです」。その仕事先では、貸家を紹介してくれる人も出会え、首尾よく家族で移住に成功。その後も人の紹介で観光事業を広く手掛ける「奥多摩総合開発」に就職することができた。今は、昨年オープンした「はとのす荘」の副支配人として働きながら、家族4人で奥多摩暮らしを満喫する。「もともとのおんき。だから何をやって生活はしていけるかどうかで確信してた。だから移住に関して深く悩んだということもありませんでしたね。今も満足ですけど、この先いつかは自給自足を実践してみたいって密かに考えているんです」

16

Job **Office worker**
Name **Fujio Harashima**

JR古里駅からほど近くに建つ、山々を見晴らす日当たりのいい家。その庭先に、白く美しいミニチュアホースがいる。性格は、犬と猫の中間のような感じ。怒られたらしゅんとするし、こっちの言っていることは大体理解しているけど、融通がきかないところもある。生まれも育ちも奥多摩という原島さんが、馬を飼ったのは今から6年前。きっかけは、趣味の競馬。ある時、百円で買った馬券が数十万円に化けた。突如手にした大金をただ浪費するのはもったいないと、ずっと憧れていた馬との生活をスタートすることに。そして、当時4歳だった北海道育ちの白馬、アンジェリーナを迎えた。犬のようにリードを付け、近所をぐるりと一周するのが日課だ。「草をはんだり、散歩はゆっくり1時間くらい。ただ、クワの実やビワ、柿が実る時期になるともっと長くなる。実がなる場所をよく覚えていて、その時期になると必ずそこを通りたがるんです。落ちてる実を食べ尽くすまでどこでも動かない」。おやつのにんじょうを用意して、アンジェリーナが立ち寄ることを心待ちにする高齢者がいるなど、近所ではアイドル的な存在。山間に広がる四季の美しさや地域の人々との交流を、より濃密に実感できるアンジェリーナとの散歩が、原島さんにとってかけがえのない時間だ。

